

お知らせ



地域医療
連携室

『やくばと病診連携』を導入しました！

インターネット紹介予約受付について

当院では、インターネットによる予約受付を推奨しております。
紹介予約業務のさらなる効率化を図るため、Web紹介予約ツール『やくばと病診連携』(メドピア社)を導入いたしました。これにより、「やくばと病診連携」(無料)にお申し込みいただいている地域医療機関の先生方は、インターネット経由で直接初診予約を取得できるようになりました。

「やくばと病診連携」による紹介予約の仕組み

24時間
365日
申込可能

お申し込み

「やくばと病診連携」でのWeb予約日時は、紹介元医療機関と患者さま、病院での「バトンリレー」方式で決まります。

医療関係者の方へ
やくばとで
WEB紹介予約

お申し込みページは
こちら



STEP 1
紹介患者さんの情報を
やくばとで入力
(PCまたはタブレット端末)

STEP 2
Web予約URLをSMSで受信
希望の予約日時等を入力

STEP 3
患者さんの情報を病院が受信
確定日時を患者さんにSMSで連絡

読者
アンケート

ONH NEWS[オーエヌエイチニュース]では、年4回、当院の最新情報をお届けいたします。
より充実した広報誌づくりの参考にさせていただきますので、アンケートにご協力をお願いします。



特集

多様な地域のニーズに応える 脳神経センターの使命

脳神経内科 科長 / 頭痛センター長 脳神経外科 科長 / 脳神経センター長

岡崎 周平 × 藤中 俊之

脳神経内科 科長／頭痛センター長
岡崎 周平



脳神経外科 科長／脳神経センター長
藤中 俊之



特集

多様な地域のニーズに応える 脳神経センターの使命

脳神経疾患は診断がむずかしく、「どの診療科で診てもらえば良いのか」と悩まれるケースも少なくありません。

こうした課題に応え、質の高い診療を提供するため、脳神経外科と脳神経内科が垣根なく連携して診療を行う「脳神経センター」を設置。

地域医療を支える要として、重要な役割を果たしています。

ワンストップ体制で 滞りのない流れを実現

脳神経疾患は症状や治療が多岐にわたる複雑な病気であるため、脳神経外科と脳神経内科（以下：外科、内科）による横断的治療が重要です。地域の開業医の先生方におかれましては、「外科と内科のどちらに紹介すれば良いのか」と悩まれることも少なくないかと思えます。こうした課題に対応するため、当院では外科と内科がシームレスかつ積極的に連携し、高い専門性を発揮する「脳神経センター」を設置しています。

センターの特徴は、開業医の先生方からのご紹介から、検査・治療までを迅速・的確に行うワンストップ体制です。窓口を一元化することで、クリニックでは診断がむずかしいケースでも迷わずご紹介いただけます。そして、当センターでは精密な検査と正確な診断に基づき、患者さん一人ひとりに合った治療を行っています。

救急対応も強みのひとつです。夜間も外科・内科いずれかの医師が常駐しており、患者さんの症状に応じて適切な治療をスピーディに開始できる体制を整えています。脳梗塞のように1分1秒を争う疾患において、この体制が大きな力を発揮しています。

当院ではセンター開設前から外科・内科の連携が強みでしたが、センターとして組織的・体系的に取り組むことで、さらに体制が強化されたと自負しています。

外科・内科の連携により 診断・治療の質を向上

脳神経疾患の診療には高い専門性が求められ、多角的な評価が重要です。外科・内科双方の視点から意見を出し合うことで診断の精度が高まり、より効果的な治療につながります。そのために当センターでは、毎週合同カンファレンスを実施し、手術やカテーテル治療などを行う患者さんについて検討しています。

もちろん治療においても綿密に協働しています。たとえば、外科の治療を行う場合でも、遺伝的要因が影響している症例では内科が加わります。さらに、病棟が同じフロアにあり、医師同士だけでなく多職種スタッフとも臨機応変に連携をとっています。こうした取り組みにより、患者さんは総合的な診療を受けていただくことが可能です。

若手医師の教育に関しても垣根のない連携を活かしている点も特徴で

す。外科・内科にかかわらず経験豊富な医師が若手を指導することで、幅広い知識や技術の習得につなげています。

両科の強みを統合し さまざまな疾患に対応

「地域のニーズに応え、質の高い診療を提供する」というセンターの目標を実現するためには、外科・内科それぞれが高い専門性をもち、幅広い疾患に対応できることが欠かせません。

外科は大阪府内でも有数の規模を誇り、あらゆる脳神経疾患に対応できる体制を備えています。特に脳動脈瘤・脳動静脈奇形・脳出血に対する開頭手術、脳血管閉塞・狭窄に対する頸動脈内膜剥離術やバイパス手術、さらには脳動脈瘤治療用ステントを用いた先進的な血管内治療を得意としており、全国から患者さんが受診されています。

内科は、2023年4月に「脳卒中内科」から「脳神経内科」に変更しました。従来の脳卒中診療の強みを引き継ぎながら、医師体制の拡充によって、パーキンソン病や多発性硬化症などの神経難病から、頭痛・めまい・物忘れといったコモンディーズまで、幅広く対応できるようになりました。2025年10月に開設した「頭痛センター」もその一環です。そして、新しい治療薬の

導入によって治療の選択肢が増え、これまで治療がむずかしかった患者さんにも対応できるようになってきました。実際に神経変性疾患の症例数は、変更前の3倍以上に増加しています。

気兼ねなく紹介できる “開かれた脳神経センター”へ

当センターは開業医の先生方との連携強化に向けて、患者さん紹介のハードルを下げることを目指しています。「少しでも気になる症状があれば、気兼ねなく相談していただきたい」というのが私たちの想いです。そして、ご紹介いただいた患者さんの検査結果や治療内容は丁寧にフィードバックするなど、クリニックと病院が一体となった医療を推進していきたいと考えています。地域から信頼される存在となれるよう、今後も診療体制の充実に努めてまいります。

MESSAGE 地域の先生方からのメッセージ

日頃より当院と連携しながら地域医療を担っておられる医療機関の先生方に、当院との連携や、印象に残る症例についてお話を伺いました。そのうち3つの医療機関からの声を、紙面の都合上、抜粋してご紹介いたします。

湯口脳神経外科・脊椎外科 湯口 貴導 院長

日頃より、大阪医療センターの「神経救急・脳卒中ホットライン」にはお世話になっております。なかでも、必要な際に迅速につながる体制が整っている点に深い安心感を覚えています。

脳神経内科の岡崎先生には、ほぼ毎回ご対応いただき、常に親身で的確なご助言をいただいています。先日もお昼休みの時間帯にもかかわらず

ご対応くださり、大変感謝しております。また、脳神経外科の藤中先生には、手術でご多忙なかでも、紹介を迷うような複雑な症例について快くお引き受けいただいております。このように、診療現場で機能するホットラインがあることは、私たち開業医にとって欠かすことのできない基盤となっています。

あづま脳神経外科リハビリクリニック 我妻 敬一 院長

2014年に谷町九丁目駅近くに開院した当院は、脳卒中診療に真摯に向き合ってきた信念のもと、一次・二次予防に注力してまいりました。

当院でも膜下出血や脳梗塞が判明し、緊急治療を要する際、PSCコア施設である大阪医療センターはまさに頼みの綱です。当番の先生方が受け入れを前提にご対応くださる体制は、一刻を争う現場では何よりの支えと

なっています。また、ギラン・バレー症候群やパーキンソン病が疑われる症例など、脳神経内科領域においても丁寧にご高診をいただいております。急性期治療から逆紹介まで、安心して患者さんをお任せできる貴院は、地域医療を担う私たちにとって不可欠な中核病院です。

いわた脳神経外科クリニック 岩田 亮一 院長

当院では頭痛専門外来を行っており、命に関わる疾患が背景にある場合も少なくありません。クリニックで安全・迅速な診療を行うには、円滑な病診連携が不可欠です。

大阪医療センターには医師直通のホットラインが設置されており、病状を把握したうえで速やかに受け入れていただける体制は大きな支えとなって

います。診断に迷う症例にもご対応いただき、検査結果や治療内容を丁寧に共有いただける点も心強く感じています。「緊急時には大阪医療センターで対応できる」とお伝えすると、多くの患者さんが安心されます。複雑な症例は貴院にお願いし、継続的な診療を当院が担う体制により、私たちも自信をもって診療にあたれています。

🔍 Doctor's View 当院診療科の代表医師が

医師が語る診療科の“現在”

治療・手術などの取り組みや実績についてお話しします。



感染症内科

感染症内科 科長
渡邊 大 Watanabe Dai

多職種が連携する
チーム医療で全人的医療を

HIV感染症は治療の進歩により、適切な管理が可能な疾患となりました。当科は全国8ブロックにあるエイズ治療ブロック拠点病院の感染症内科として、高い専門性をもつ医師を中心に多職種が連携し、質の高い診療を提供しています。

近畿の要となる施設として 診療・研究・教育などを展開

当科は1997年に総合内科の診療グループとして開設され、2001年から免疫感染症科として診療を開始しました。その後、2009年に厚生労働省が定める医療法施行令に基づき、現在の感染症内科へと名称を変更しました。

主な対象疾患はHIV感染症であり、専門的な診療体制を整えていることが特徴です。(活動性肺結核や第一類感染症、第二類感染症などは対象外です)。

また当院は近畿ブロックのエイズ治療ブロック拠点病院に指定されており、近畿2府4県の中核拠点病院や、約40施設あるエイズ治療拠点病院と連携し、診療・研究・教育・情報発信に取り組んでいます。

近年、予防啓発活動の効果もあり、HIVの新規感染者数は全国的に減少しています。当科においても2010年には新規HIV感染者数:約160名・新規エイズ患者数:約60名でしたが、現在はそれぞれ約50名・約10名となっています(2024年

次実績)。かつては予後不良の致命的疾患とされていたHIV感染症ですが、1990年代後半に複数の抗HIV薬を組み合わせる治療方法が確立されて以来、治療効果は大きく向上しました。近年は治療薬の開発が進み、多くの場合1日1錠の内服、あるいは2か月ごとの注射治療が可能です。治療効果についても、当科に通院されている患者さんの98%は血液中のウイルスが検出されない状態にあり、適切な治療によって長期的な健康維持を目指せるようになってきました。

QOLの維持に努め 患者さんの暮らしを支える

HIV感染症の治療では、患者さんのQOLをいかに維持するかが重要であり、その点で多職種が切れ目なく連携するチーム医療が大きな力を発揮します。当科では、HIVコーディネーターが日々のケアに加え、患者さんと病院、スタッフ同士をつなぐ役割を担っています。また抗HIV薬は薬物相互作用への注意が必要なため、専門的な知識をもつ薬剤師が服薬指導を

行います。院内にはメンタル面を支えるカウンセラーが常駐している他、MSWが経済的負担を軽減する制度活用をサポートしている点も特徴です。そして、医師は患者さんの状態や生活背景、希望などを考慮したうえで適切な治療方法を提案し、寄り添った治療を行っています。

こうしたリソースを活かして、診療だけでなく臨床研究や治験、若手医師の育成にも力を注ぎ、HIV感染症診療の発展に貢献したいと考えています。



ドクターからのメッセージ

新規感染者数が減少する一方、当科では通院患者さんが増加しており、プライマリーケアも行う状況が続いています。地域医療推進や患者さんの通院負担軽減のためにも、開業医の先生方にプライマリーケアを担っていただくと大変心強く感じます。



乳腺外科

乳腺外科 科長
八十島 宏行 Yasojima Hiroyuki

患者さんを生活者と捉え
寄り添う治療とサポートを

当科は「To live strong」をモットーに、患者さんが病気に立ち向かい、自分らしい生活を取り戻す“強さ”をもてる診療を目指しています。また、患者さんの負担を少しでも軽減できるように、診断から治療開始までの期間を短縮している点も大きな特徴です。

患者さんの負担軽減に向けて 迅速・適切な診療体制を構築

乳腺外科は、悪性腫瘍(いわゆる乳がん)・良性腫瘍(線維腺腫、葉状腫瘍、乳管内乳頭腫など)を問わずさまざまな疾患に対応していますが、大きな割合を占めるのは乳がんです。乳がんは女性がんのなかで最も多く、「約8人に1人がかかる」といわれています。罹患者数は横ばいながら、乳がん検診の普及や治療の進歩によって予後は大きく改善しています。しかし大阪府の乳がん検診の受診率は全国平均を下回っており、私たち医療従事者が啓発活動に注力する必要があると感じています。

効果的な治療のポイントとなるのは早期治療です。当科では、クリニックで診断を受けてから、治療方針の決定・治療開始までの期間を短くするためにさまざまな工夫をしています。たとえば、初診時にCT検査を行い、約2週間後には治療方針を説明できる体制を整えています。

もちろんスピードだけを優先するのではなく、がんの性質や患者さんの状態、生活スタイルを

踏まえたうえで最適な治療方針を検討します。そして説明の際には治療のロードマップをお伝えすることで安心感をもっていただけるようにするとともに、仕事や育児・介護などの両立をサポートしています。

手術を行う場合も 日常への復帰をスムーズに

手術についても初診から約3週間後に受けていただくことが可能です(症例によって期間は異なります)。乳房全切除の場合、一般的な切除に比べて入院期間が長くなりがちですが、当科ではこれまで培ってきた知見と技術を活かした低侵襲手術により、術後3日で退院できるよう努めています。

また、新しい治療が受けられるように、治験や臨床試験を推進している点も特徴のひとつです。当院は世界規模で新薬の開発・承認を目指す「国際共同治験」に参加しており、有望な治療薬をいち早く提供できる環境を有しています。

当科は、患者さんを“病人”ではなく“一人の

生活者”として診療することを大切にしています。それは「病気を診るだけでなく、人を診る」という姿勢にほかなりません。その考えを実現する取り組みのひとつが、「大阪谷町がん哲学外来カフェ」です。NPO団体のみなさんの支えのもと、年2回開催されるウォーキングイベントなどを通じて患者さんとの交流や心の支えとなる場づくりを行っています。

今後も診療科のメンバーや関係者の方々と協力し、患者さんに寄り添った治療を行っていきたいと考えています。



ドクターからのメッセージ

開業医の先生方へは書面に加えてメールでも情報共有し、切れ目のない診療につなげています。信頼関係の構築に向けて、できる限り直接のご挨拶にも努めています。今後も連携を深め、地域で患者さんを支えていければと考えています。

Close UP!

大阪・関西万博への救急医療協力

2025年4月13日から10月13日までの184日間をわたって開催されたEXPO 2025大阪・関西万博は、「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに、国内外から多くの来場者が訪れました。当院も地域の中核医療機関として救急医療体制に協力し、安全で安心な開催に向けて取り組みました。



会場を支えた“チーム大阪”の医療連携

EXPO 2025大阪・関西万博会場内には危機管理センター、3つの臨時診療所、5つの救護所が設置され、これらが緊密に連携しながら会場の安全を支えました。診療所と危機管理室には常時医師が配置されており、そのうち2つの診療所では大阪府医師会の先生方が活躍されていました。私たちが現地の救急医として連携し、来場者の健康を守る活動に携わることができました。現場では警備員やボランティア、危機管理室の専門家など多職種が協力し、まさに「チーム大阪」として安全管理にあたりました。

一般入場者数は約2,529万人と報道され、会場内では熱中症や転倒などによる軽症外傷が毎日のように発生しました。救急要請は軽症から重症まで多岐にわたり、当院では救命救急センターが連絡窓口となって関係部署と連携し、迅速かつ円滑な受け入れ体制を整えました。会場から鉄道でのアクセスが良いこともあり、外国人来場者が直接来院されることも多く見られました。言葉や文化の違いを越えて、職員が丁寧に対応する姿が印象的でした。

その中には、会場内で心肺停止となった来場者が、周囲の人々による迅速な心肺蘇生と救急隊への円滑な引き継ぎを経

て、当院での治療の結果、社会復帰された事例もありました。一つの命をつなぐために多くの人が力を合わせたこの経験は、まさに万博の理念「いのち輝く未来社会」を体現する出来事でした。

多職種連携で得た経験と地域医療への展望

ブルーインパルス展示飛行の日には、危機管理室の当番医を当院の医師2名が前半・後半で担当し、ちょうど交代の時間帯にブルーインパルスが飛行しました。緊張感の中にも、万博の高揚感と一体感を感じる印象的な瞬間でした。

今回の協力を通じて、行政・消防・地域医療機関との連携の大切さを改めて実感しました。多くの先生方、特に大阪府医師会の先生方と共に活動できたことは大きな財産です。今後もこの経験を糧に、災害時にも日常にも強い救急医療体制を地域全体で築いていきたいと考えています。地域の先生方には、今後とも温かいご理解とご支援をいただければ幸いです。

救命救急センター
ER・救命救急科 科長 / 石田 健一郎



診療ユニフォームを着て撮影



賓客対応にかかる多職種での机上シミュレーション



消化器内視鏡センターのご案内

幅広い検査と緊急対応体制

消化器内視鏡センターでは、上部・下部消化管内視鏡、超音波内視鏡、胆膵内視鏡、小腸内視鏡、カプセル内視鏡など幅広い検査に対応し、早期がんに対する内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)や胆膵疾患の治療も実施しています。すべての検査は鎮静・鎮痛に対応し、快適な回復のためのリカバリースペースも完備しています。加えて、地域の開業医の先生方からの紹介を迅速に受け入れる体制を整えており、平日夜間や緊急時でも、消化管出血、急性胆管炎、腸閉塞などの緊急症例に対応可能です。緊急時には、紹介後すぐに専門医が診察・検査・処置を行い、入院管理やフォローまで一貫して行います。地域の医療機関の皆さまと密に連携し、安心してご紹介いただけるパートナーとして信頼いただける医療サービスを提供いたします。



消化器内視鏡センターのHPはこちら



EVENT&TOPICS

▶ 第65回 法円坂地域医療フォーラムのご報告

2025年11月15日(土)、「第65回法円坂地域医療フォーラム」を開催しました。テーマは「当事者と共に考える糖尿病医療 — 心理面から最新医療まで —」とし、86名の方にご参加いただき、盛会裏に終了しました。ご参加いただいた皆様に、心より御礼申し上げます。

第1部では、当院の秦誠倫医師・松廣有紀医師がそれぞれ「新しい糖尿病治療薬」、「1型糖尿病・膵切除後糖尿病を持つ方を支える先進糖尿病テクノロジー」を講演し、新規薬剤やCGM・インスリンポンプ、AID療法の実臨床での有用性をデータとともに共有しました。

第2部では、当院シニアレジデントの石橋幹也医師による「ピアサポーターの重要性 ~私にとっての岩田選手~」を講演しました。さらに、阪神タイガース元投手・岩田稔氏をお招きし「やらなしゃない! ~1型糖尿病だからできたこと~」をご講演いただきました。ご参加いただいた皆様にとって、1型糖尿病という疾患や、1型糖尿病を持つ方々の心理に触れる貴重な機会になったと考えます。

当科では糖尿病医療において多面的かつ先進的な取り組みを進めるとともに、内分泌疾患や肥満症にも力を入れております。お困りの方は、ぜひお気軽にご相談いただければ幸いです。

糖尿病・内分泌内科 科長 / 加藤 研

次回の開催予定

2026年2月7日(土)
血液内科・血友病科
お申し込みはこちら ▶

